

農作物の力で福島復興

東京電力福島第一原発事故から間もなく4年がたつが、今も福島県の農作物は一部から国の基準値を超える放射性セシウムが検出され、出荷制限が続く。元福島県職員という異色の経歴を持つ研究者として、「この状況を少しでも改善したい」と対策を模索する。

同県いわき市出身で、1998年に県の農業系技術職に就職。農業試験場で大豆の有機栽培に取り組み傍ら、週末は東京大に通い、放射性物質で植物の養分吸収の仕組みを調べる新技術を学んだ。夜行バスで論文を読み込む地道な努力が実り、07年には国から優秀な研究者に選ばれた。

そんな生活は原発事故の境に一変した。県が急ぎよ作った農作物の放射性物質対策チームに加わり、同僚が「ベクレル」「シーベルト」などの専門用語に苦戦する中、海外の文献や資料を調べこめるの付け基準を決めていった。

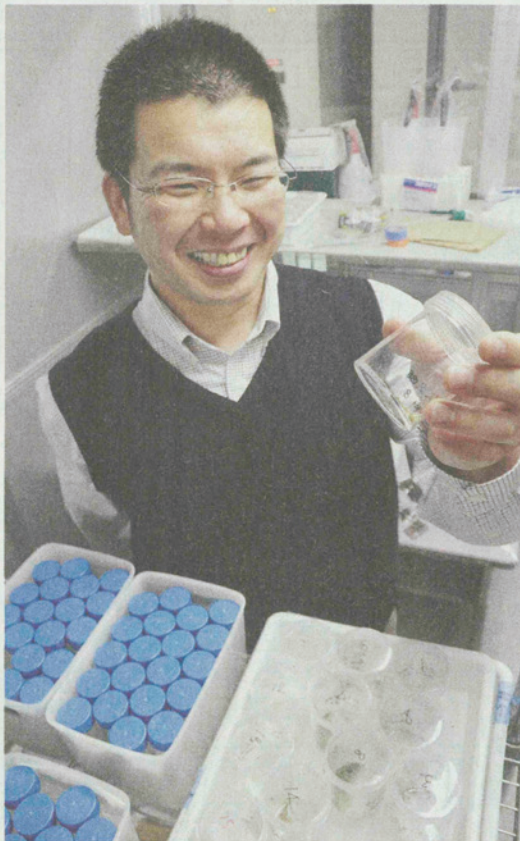
駆ける

氏 43 直登 氏 43
東京大

だが、次第に「自分で農作物からセシウムを減らす方法を考えたい」という思いが強まる。「数年待てば元の試験場に戻り研究もできるけど、放射性物質は時間と共に変わる。今、調べるべきではないのか」と悩んでいたとき、事故前に通っていた東大の研究室が准教授を公募しているのを知った。「やらない方が後悔する」。迷わず応募し、13

年6月に採用された。全村避難が続く同県飯館村の畑で、大豆が土壌からセシウムをどう吸収するかを調べている。野生の猿に大豆の芽を食い尽くされたこともあったが、「やっぱり野外の作業は楽しい」と表情は明るい。

調査から、大豆は根の表面に生える細い根からセシウムを吸っている可能性が高いことが分かってきた。今年、東大の5年の任期が切れた後の見通しはない。「先のことと考えるより、この5年間は『灰』になるまで研究をやりたい」。肩書が変わっても、福島への思いが揺らぐことはない。(船越翔)



研究のため昨年は福島県に30回ほど通った。「農業の現場で培ってきた経験と、大学の技術や知識を組み合わせたい」(東京都文京区の東京大で)

1998年、東北大学大学院修士課程修了。福島県庁を経て、2013年6月から東京大大学院農学生命科学研究科准教授。農学博士。